

Der Nibelunge Nôt における否定表現の研究

— niemen, nie, nimmer との関連から
見た ne の衰退の様態について —

岡 崎 忠 弘

<序>

§ 1. 問 題 提 起

§ 2. niemen, nie, nimmer の使用頻度

<本 論>

§ 3. ne の現われる条件

§ 4. ne の現われる条件の信憑性

§ 5. Aufakt における ne の有無の恣意性

§ 6. 詩形調整の ne の有無

<結 び>

§ 7. ne の衰退の様態

序

§ 1 問 題 提 起

Der Nibelunge Nôt の否定文はある時は本来の否定詞 ne を有し、ある時は ne を放棄している。一体 ne はどのような取り扱いを受けているのだろうか。先に私は、「Der Nibelunge Nôt における否定表現の研究 — 否定詞 ne の衰退の様態について」(近畿大学工学部紀要、外国語外国文学、第 2 号)の拙論において、niht との関連から捉えた ne の衰退の様子を調べ、ne には既に空洞化現象が起り、形骸化が進んでいることを論じた。その際、次の 3 点をその論拠とした。

1. 否定詞 ne はその現われる位置が極めて狭く規定されている。文中どこに位置する定形にでも ne は添付され得ない。「ne — niht 型の否定文では、ne は文頭に立つ単音節の語と助動詞・動詞の定形の間介在する」という規則性が抽出される。

2. ne — niht 型における否定詞 ne の詩形上の位置はその殆んどが上拍 (Auftakt) と呼ばれる韻律の枠外にあり、かつ niht 単独型の否定文と照合することによって、上拍の ne は全くそ

の存在が恣意的なものであることが突き止められる。

3. 上拍以外の位置にある、つまり韻律に関与している *ne* の詩形の意義を問うに、*ne* は韻律調整のための取捨自在の補助手段として用いられているに過ぎないことが認められる。

否定代名詞 *niemen*、否定の副詞 *nie*、*nimmer* と共に用いられている否定詞 *ne* にも上記の3つの論拠が求められるかどうか、*ne* の空洞化・形骸化現象が論証されるかどうか。これを本論のテーマとする。

§ 2 *niemen, nie, nimmer* の用例頻度

Ingeborg Schröbler はその共著；“Mittelhochdeutsche Grammatik” (Max Niemeyer Verlag Tübingen 1969 20. Auflage, H. Moser が Laut- und Formenlehre を、I. Schröbler が Syntax を分担している) の Negation の項で、*ne — nieman; ne — nie* について次のように述べている。

3. *ne—nieman; ne—nie*

In Sätzen, welche das substantivische Pronomen *nieman* oder das adverbale *nie* aufweisen, kann *ne* als Verneinung zu dem Verbum finitum hinzutreten oder es kann fehlen. Die Stellung von *nieman* oder *nie* im Satz, vor oder nach dem Verbum finitum, scheint dabei nicht ohne Bedeutung zu sein; Wenn (α) das verneinende Pronomen oder Adverb dem Verbum finitum vorangeht, ist *ne* bei gewissen Autoren entbehrlich; wenn (β) das Verbum finitum dem verneinenden Pronomen oder Adverb vorangeht, ist seine Verneinung durch *ne* um der Deutlichkeit willen erwünscht. Das erstere trifft z. B. für Hartmann, NL, Gottfried zu, das zweite gilt für Hartmann in großem Umfang, während im NL und bei Gottfried *nieman* oder *nie* häufig auch dann allein die Verneinung bezeichnen wenn sie dem Verbum finitum nachfolgen.¹ Die Entwicklung verläuft auch hier in Richtung auf die gänzliche Entbehrlichkeit von *ne* zu.

I Für Einzelheiten fehlt statistisches Material.

I. Schröblerはneがentbehrlichかどうかの問題を、nieman, nie が定形に vorangehenしているか、あるいはnachfolgenしているかの観点から論じている。そして Der Nibelunge Not (以下Nib.と略す) に関しては、(α) nieman, nie が定形に vorangehenしている場合にはneはentbenrlichであり、(β) nieman, nie が定形に nachfolgenしている場合にはneは在る方が望ましいが、nieman, nie がしばしば単独で否定を表わす、つまりneはしばしが省略される、としている

この否定代名詞あるいは否定の副詞が定形に先行するか後続するかの観点は、私がnintとの関連におけるneの研究の際に用いたところの、①neの文中における位置の抽出、②詩形分析によるneの有無に関する考察とどのように重なり合うのだろうか。この点が私の興味を著しく惹くと同時に、註のFür Einzelheiten fehlt statistisches Materialなる言葉に励ましを見い出した。

そこで先ず I. Schröblerの観点に副って、Nib.に現われるniemen, nie, nimmerの用例を全章に亘って蒐集し類別して次の結果を得た：

niemen	en一定形	5 例
niemen	定 形	2 6 例
ne一定形	niemen	2 6 例
定 形	niemen	4 8 例
nie	en一定形	0 例
nie	定 形	6 4 例
ne一定形	nie	2 2 例
定 形	nie	4 0 例
nimmer	en一定形	0 例
nimmer	定 形	2 1 例
ne一定形	nimmer	4 0 例
定 形	nimmer	4 0 例

(註) ①テキストには写本B、“Das Nibelungenlied” nach der Ausgabe von Helmut de Boor, vierzehnte Aufgabe, F. A. Brockhaus Wiesbaden 1957, を用いた。②否定詞neはen, in, -n, n-の異形を有するが、必要な場合を除きすべてneとする。③nieman, nioman と niemen は全く同じものであり、用いた

テキストでは与格 *niemen* が 1 例、属格 *niemannes* が 3 例見られるのみで、残りはすべて *niemen* として現われる。よって以下は *niemen* と記述する。④ *nie* と *nimmer* は否定の副詞という点で共通するので、この小論の対象とする。

さて上の用例表を検討してみよう。なるほど I, Schröbler が上記(a)で述べているように、*niemen*, *nie*, *nimmer* が定形に先行する場合には、*niemen* — *en* 定形の 5 例はあるものの、定形に *ne* は添付されないとと言える。しかし、これらが定形に後続している場合には、*niemen* と *nie* では約 25 % が、*nimmer* にあっては実に 50 % が *ne* — 定形の用例である。I. Schröbler の説明は *niemen* と *nie* に関して述べたものであるから、“häufig” なる表現は当を得ているわけであるが、*nimmer* の 50 % をも含めてもう少しすっきりした説明はできないものだろうか。*niemen*, *nimmer* の定形に対する位置の観点からは、*ne* の有無の説明としては、その傾向を漠然と示せるが、*ne* の取捨の要因は求められず、あくまで“häufig” に留まるのではなかろうか。用例数の多寡の比較に終始してはこれ以上展開できず、*ne* の有無の傾向を推測するに留まろう。

そこで上記の用例数のリストのうち、*ne* を取っている用例、即ち < *ne* — 定形 — *niemer*, *nie*, *nimmer* > における *ne* の検討をもって本論のテーマの進展の手掛りを把みたい。

本 論

< *ne* — *niemen*, *nie*, *nimmer* > 併用型の否定文は、*niemen* に 26 例、*nie* に 22 例、*nimmer* に 40 例、合計 88 例見い出される。これらの用例を文型上の類似によって組み分けする。便宜上次の式を設定する。A と B は *ne* 及び *niemen*, (*nie*, *nimmer*) 以外の文要素とする；

A + *ne* + B …… *niemen* (*nie*, *nimmer*) …

A に位置するものによって全用例は次のように類別できる； —

- (1) 人称代名詞・指示代名詞の主格が位置する場合；

sine gâben vride *niemen* wan dem einem man. 2211, 3
di'n hânt nu leider *niemen*, der ir mit triuwen pflege. 1195, 3
“*ine* wart mîn selbes mäge *nie* sô rehte vrô, 1504, 2
ez *enwart* noch *nie* an helden wirs von friunden getân. 2183, 4
ine trûwe iu, schoeniu vrouwe, doch *nimmer* an gesigen. 638, 3
er'n möhte sînen lieben sun *nimmer* lebendec gesehen. 1016, 4

(2) 単音節で、かつ主語となり得ない語の位置する場合；

des enkunde iu ze wære niemen gar ein ende geben. 12, 4

Iu enkunde niemen daz wunder volsagen. 1036, 1

d^one wolt' et Hagene nie des rates abe g^an. 882, 4

Jane wart nie wirs gel^onet s^o rⁱcher g^abe m^er. 2221, 1

jane dorften nimmer helde baz gehandelet sⁱn. 1669, 4

mir enwurde nimmer leider denne umbe sⁱnen lⁱp. 2259, 3

(3) 2音節以上からなる名詞・語句の位置する場合；(次の5例のみ)

daz sine wesse niemen den minnen wolde ir lⁱp. 18, 3

daz in endarfze der werlde niemen holder gesⁱn. 734, 4

"der r^at enz me niemen wan einem degene, 2012, 2

wand' ine kund' in nimmer vor mⁱnem t^ode verklagen. *1019, 4

z'allen mⁱnen sorgen son' gerte ich niemens m^er, 1831, 2

さて(1)と(2)に共通して言えることは、

1. 上式Bには例外なく助動詞・動詞の定形が位置していること。
2. Aの位置は例外なく文頭であること。
3. いずれも主文であること。

<ne — niemen, nie, nimmer>併用型否定文88例中、上記(3)の5例を例外として残りはすべてこの3つの共通点を有している。(1)のAに位置する人称代・指示代の主格はすべて単音節の語であるから、この点で(2)のAと同時に取り扱ってよい。1・2・3.を上式に代入すると、

(文頭に立つ単音節の語) + ne + 定形……niemen (nie, nimmer) … (主文)

となる。この式は否定詞neの現われる条件を次のように規定する；

条件1. その文が主文であること。

条件2. その主文が単音節の語ではじまっていること。

条件3. その単音節の語の直後に定形は位置していること。

この三条件の満たされる文にはじめてneは現われる。勿論この条件を満たせば必ずneが定形に添付されるというのではない。この条件を完全に満たしていてもneの付されない定形はいくらでも見い出される。条件にかなっていながらneが添付されていない用例もある、という事実こそneの命運を如実に語っているが、これについては§5で詳述する。

I. Schröblerも述べているように、また先に挙げた否定表現の分類リストも明示しているように、定形がniemen, nie, nimmerに先行している否定文にneは現われるが、以上の検討

を通して、neの現われる条件は更に狭く限定されていることが知られる。定形がniemen等に先行していさえすればneが現われるのではなく、上記の三条件の下でのみneは現われる。ここにneの否定詞としての活性の衰退を認めることができよう。

更に加えて次の事実を指摘しておかなくてはならない。〈ne定形 — niemen, nie, nimmer〉併用型否定文の定形は、niemenでは26例中14例まで助動詞であり、その14例中8例までkunnanであり、nieでは22例中12例が助動詞であり、その12例中10例までがwerdenであり、更に動詞の定形10例中6例までがine gesach…nie…となっている。nimmerにあってはこの傾向は更に著しく、40例中33例まで助動詞の定形であり、その33例中17例までkunnanである。

また文頭に立つ単音節の語の位置にもあらゆる単音節の語が自在に現われるのではなく、got, frôhの例がそれぞれ1例ずつ認められるものの、その殆んどがjâ, sô, dô, nûの副詞であり、人称代・指示代の主格及び斜格である。これらの2点にも否定詞neの限定の狭さが見てとれるのである。

§ 4 neの現われる条件の信憑性

先節§ 3の(3)に類別した例外の5例を無視することはもとより許されない(§ 6の(2)で扱う)。いや例外的事象こそある規則的現象の規則性を逆に裏付けしてくれるものである。このことを踏まえた上で、この節では、〈ne — niemen, nie, nimmer〉併用型否定文が、1.主文にのみ現われること；2.副文に現われないこと；3.定形がniemen, nie, nimmerに先行しているのに、否定詞neが定形に添付されないこと；4.定形がniemen, nie, nimmerに後続している否定文はneが定形に添付されないこと、以上の4点を考察する。

前節の否定詞neの現われる三条件はあくまでneの現われている用例から抽出したものである。この条件が満たされていない用例ではneが現われていないことを、換言すれば、neの現われていない用例ではこの条件が欠けていることを実例に則して証明できなければ、この条件はある規則的事象の半面しかついていず、片手落ちと言わざるを得ない。若し理論的にも実例にもおいても証明できれば、この条件の信憑性は高まる。この意味において上記の1.～4.の現象の考察の必要性が認められる。

1. 〈ne — niemen, nie, nimmer〉併用型否定文が主文のみに現われる現象について；—
〈A + ne + 定形…… niemen, nie, nimmer〉併用型の否定文において、Aに位置するのは人称代・指示代の主格であるか、あるいはそれらの斜格ないしjâ, sô, dô, nûの副詞であることは既述したが、若し前者なら、主語 + ne + 定形…… niemen, nie, nimmer……となって、明らかに正置の主文であるし、若し後者なら、neを取る否定文は前節で見たように定形までの語順

は決定しているから、主語はniemen等の前後を問わず定形より後に位置する。するとこれは倒置の主文である。P. 4 の(1)に挙げた例文が正置の主文であり、P. 5 の(2)の例文が倒置の主文である。

2. <ne — niemen, nie, nimmer>併用型否定文が副文に現われない現象について；一定形がniemen, nie, nimmerに先行している否定文が副文なら、その文頭に副文を導く従属の接続詞・副詞的接続詞あるいは関係代名詞・関係副詞が位置し、更に、詩形調整の必要から定動詞後置の原則が貫かれなくても、これら副文を導く語の直後に定形が位置することは先ず考えられない。従って副文では副文を導く語の直後には定形以外の文要素が配置され、定形は文頭に最も近い位置でも第三語目となる。とすれば、否定詞neが現われるための条件、つまり、「文頭に立つ単音節の語の直後に位置する定形にのみneは添付される」という条件と、副文たることの条件とが一致しない。よって副文には<定形 — niemen, nie, nimmer>単独型否定文こそ現われ、併用型の否定文が現われるとは理論上考えられない。

実際にはどうであろうか。定形がniemen, nie, nimmerに先行している用例、つまり<ne — 一定形 — niemen, nie, nimmer>併用型と<定形 — niemen, nie, nimmer>単独型の全用例を調査してみた結果、副文でかつ併用型否定文はniemenに2例見られるのみで、nieにもnimmerにも認められない。一方単独型否定文ではniemenに6例、nieに2例、nimmerに10例の副文が見い出される。

併用型の2例の副文が上の論理的結論を破っているのだろうか、併用型否定文は副文には現われていないという規則性を崩しているのだろうか。確かに副文中の定形にneが添付されている。ところがこの2例にはその現われざるを得ない必然性があって現われているのである；

daz si—ne wes—se nie—men den minnen wolde ir lîp. 18, 3
 (x) | ẋ x | ẋ x | ẋ | ẋ
 daz in en—darf ze der werl—de niemen holder gesîn. 734, 4
 (x) | ẋ x | ẋ x | ẋ | ẋ

この分析から分るように、詩の韻律を整える必要からやむえずneは添付されている。

この2例以外の副文はすべて単独型否定文に見られる。下記の用例の定形の文頭よりの位置に注目したい。neの現われる条件を破っている位置にある定形にはneは付されていない；

daz im daz sagte niemen, daz was Gunthere leit. 80, 4
 ob ir zen Hiunen hêtet niemen danne mîn, 1256, 2
 daz disen grôzen jâmer kan niemen understan. 2136, 2

しかし次の2例はいずれも副文を導く語が文頭に配置されていない；

den sînen vîanden wart daz kunt getân.

ir goldes gerte niemen, daz si dâ buten ê. 316, 3

Hagene ahtet' ringe, gevidelte er nimmer mêr. 1965, 1

316, 3の文はir以下がdaz kuntの内容を説明している間接文で、daz (=daß)が省略されており、1965, 1の文はobの位置にgevidelteがきてobが省略されている目的語文である。よっていずれも副文である。後者のような文例では必ず定形が文頭に立つから、つまり定形の直前に位置する単音節の語がないから、ne一定形とはならないことがうなずけるが、前者のような間接文ではどうなるのだろうか。316, 3の文は韻律を考慮せずにかきかえて、niemen gerte ir goldesとしても、niemenが2音節の語であるからen-gerteとはならない。しかしこのようなdazの省略された間接文で文頭に立つ単音節の語の直後に定形が位置したら、果してne一定形となるのだろうか。これに関してはその実例がNibに見られないのでどうとも言えない。

3. 定形がniemen, nie, nimmerに先行しているのに、否定詞が定形に添付されないことについて；――

上記の2においては＜定形――niemen, nie, nimmer＞単独型否定文のうち副文のみをその対象とした。ここではこの単独型否定文の用例の大部分を占めている主文を取り扱う。定形先行の単独型否定文は定形の位置によって大きく2つに類別できる；

①定形が文頭に立つ単音節の語の直後に位置している場合；②文頭より数えて定形が第3語目以降に位置している場合

①の場合は韻律を乱さない限り、neの添付が可能であるが、この節では否定詞neの現わられる条件が若し破られた場合にはneが現われないというマイナスの面からの裏付けが得られるかどうかを論点としているので、②のみがその対象となる。

若し文頭より数えて第3語目以降に位置する定形にもneが添付されるのであれば、neの現われる三条件は完全に崩れ去る。この三条件が正しいためには、そういう位置の定形にneが添付されてはならない。理論的にはneが定形に付くはずはないと考えられるが、実証するために全用例にあたって調べたところ、文頭に立つ単音節の語の直後を離れて第3語目以降に位置する定形にはやはりneは付されていない、この三条件の信憑性を高めている。以下いくつかを列挙しておく；

“Nâch mir sande niemen”, sprach dâ Hagene. 1788, 1

den schaz den weiz nu niemen wan got unde mîn; 2371, 3

Überwinden kunde niemen dâ daz wîp 1220, 1

die unser hovereise tuot in niemen baz bekant. ” 530, 4

die wîle liez in Hagene nie slâhen einen slac. 2053, 3

sô rehte grimmer verge der kom dem Tronegære nie. 1560, 4

(rîcher sîner mâge wart noch deheiner nie) 721, 2

ze so grôzem antpfange (des wir wol mûgen jehen)

wart nie sô vil der vrouwen bî ein ander gesehen. 583, 4

von helden kunde nimmer wirs gejaget sin. 1002, 2

Bî der sumerzîte und gein des meien tagen

dorft’ er in sîme herzen nimmer mêr getrâgen. 295, 2

zuo ir vater lande kom diu vrouwe nimmer mē, 526, 4

den mînen besten vriunden sold’ez nimmer werden leit.” 1149, 4

いずれの用例も定形が第3語目以降に位置して、「文頭に立つ単音節の語の直後に位置する定形に ne は添付される」という条件に低触している。1220, 1 の文例では定形は第2語目に位置しているが、文頭に立っている *uberwinden* が単音節の語でないので、やはり条件を満たしていない。なお、ここに類する用例は § 6. において詩形の観点からも考察を加えたい (P. 13)。

4. 定形が *niemen*, *nie*, *nimmer* に後続している否定文では *ne* が定形に付されないことについて； —

定形が *niemen*, *nie*, *nimmer* に後続している否定文を定形の位置を基準にして分類すれば、理論上次の4つのグループが可能となる；

- (1) *niemen*, *nie*, *nimmer* + 定形 ……
- (2) *niemen*, *nie*, *nimmer* + 他の文要素 + 定形 ……
- (3) 他の文要素 + *niemen*, *nie*, *nimmer* + 定形 ……
- (4) 他の文要素 + *niemen*, *nie*, *nimmer* + 他の文要素 + 定形 ……

niemen と *nimmer* は2音節の語であるから、(2) (3) (4) の文においては勿論のこと、(1) の定形がこれらの直後に位置する文においても、「文頭に立つ単音節の語」の条件に合わない。よって、否定詞 *ne* の現われる条件が正しいとすれば、理論上も *niemen*, *nimmer* が定形に先行している否定文では < *niemen*, *nimmer* — en — 定形 > 併用型否定文は現われないと考えられる。

但し *nie* の場合はどうであろうか。(2) (3) (4) の文なら、他の文要素がはいり込むことによって定形の位置が *ne* の現われうる位置からうしろへずれるから併用型否定文の現われる可能性はないと考えられるが、*nie* は単音節の語だから、(1) の文なら、つまり文頭に立つ *nie* に定形が直続している場合には *ne* の現われる条件にかなっている。従って定形が *ne* を取ることは可能である。

以上は否定詞 *ne* の現われる三条件が正しいという仮定に立って理論上 *ne* の現われる・現われないことを推論したものである。事例にあたつてこの推論が実証されれば、*ne* の現われる条件が破られる場合には *ne* は現われまいと言っても差つかえないことになる。以下事例を見てみよう；

(1) niemen, nie, nimmer + 定形……

ir muoten kûene recken, niemen was ir gram 3, 2
 nie getruogen mære sô manic rîche gewant. 778, 4
 nie gelebte Prûnhilt deheinen leideren tac. 847, 4
 Ich was dir ie getriuwe, nie getet ich dir leit. 2102, 1
 nimmer にはこのグループに類する用例は見あたらない。

(2) niemen, nie, nimmer + 他の文要素 + 定形…… ;

Des antwurte Volkêr; “niemen in iu gît 2266, 1
 nie keiser wart sô rîche, der wolde haben wîp 49, 3
 nie sô manegen gîsel man brâht in ditze lant 238, 2
 sô von sînen schulden nu kumt an den Rîn.”
 Dô sprach der kûnec Gunther; “nie.dienest wart sô guot 2264, 1
 sô den ein vriunt vriude nâch dem tôde tuot.
 nimmer にはこのグループに類する用例も見られない。

(3) 他の文要素 + niemen, nie, nimmer + 定形…… ;

daz niemen kan erwenden iu recken iuvern muot! 1518, 3
 ob ander niemen lebte wan sîn unde dîn, 816, 2
 Mit gewalte niemen erwerben mac die meit, ; 57, 1
 swaz er selbe wolde, daz in doch niemen sah 338, 3
 si sâhen die vil gerne, die si nie heten bekant. 277, 4
 daz ich iu gerne diene und noch nie wart gehaz. 893, 2
 daz ich iu nimmer wolde geligen nâhen bî, 622, 3
 swie ich Sîvrîden nimmer habe gesehen, 86, 2
 daz iu bî dem kûnige nimmer wirdet wê. 1262, 2

(4) 他の文要素 + niemen, nie, nimmer + 他の文要素 + 定形

Volgen der von Rîne niemen man im sach. 205, 1
 dar umbe ich niemen vremden fuere in ditze lant. 1558, 3
 daz im zer werlde niemen holder mûge gesîn. 1417, 2
 daz du nie komen wærest von Wormez ^uüber Rîn. 2093, 3
 Hagene von Tronege in nie geruowen lie. 882, 2
 daz ich ir deheinen nie mêr habe gesehen, 411, 2

ich slahe in daz erz widerspel nimmer mêre darf gesagen.” 2272, 4

Daz si nimmer minnen wolde mêr deheinen man. 1254, 1

si vâhten alsô grimme daz man ez nimmer mêr getuot. 2212, 4

ここに挙げた実例に見るように、否定詞 *ne* の現われる条件以外の位置にある定形には *ne* は付されていない。ここにはこれに類する一部のみを挙げたが、Nib, 全体に亘って調査した結果は、まさに I. Schröbler の指摘の通り、<niemen, nie, nimmer — 定型> の否定文では、niemen の場合に僅か 5 例 *en*- 定形が見い出されるのみで (§ 6 の③) にて考察する)、*nie* にも *nimmer* にも定形に *ne* の添付されている用例は 1 例すら見られない。この事実も *ne* の現われるための三条件の確かさを負の面から証明していると言えよう。

ただ上記(1)の *nie* が文頭に立った場合、778, 4; 847, 4; 2102, 1 の 3 例は理論的にまた韻律の面からもそれぞれ *entruogen*, *enlebte*, *entet* が可能なのに *ge-* となっている。*ne-* と *ge-* の関係がどうなっているかについては今後の研究に委ねたい。

§ 5 Auftakt における *ne* の有無の恣意性

今までは否定詞 *ne* が文中のどこに位置しているかの観点からのみ併用型否定文を考察してきたが、ここでは *ne* が詩形上ではどんな位置を占めているかを見てみよう。<*ne*-定形 — niemen, nie, nimmer> 併用型のすべての用例にあたってみて次の結果を得た; ① *ne* は Auftakt に位置している; あるいは② *ne* は第 1 Takt に位置している、のいずれかである。

この節では①について論ずる。なお比較対象の相手として、否定詞 *ne* の現われる三条件を満たしながら *ne* の添付されていない用例、つまり<定形 — niemen, nie, nimmer> 単独型否定文のうち定形の直前に単音節の語が位置して主文が始まっている用例 (§ 4 の 3 の①) を用いる。

下記の引用例に見るように、たとえこれらの定形に *ne* が添付されても、詩形の上からは何の支障もきたさないのに *ne* が添付されていないという事実は Auftakt における否定詞 *ne* の有無が恣意的なものであることを物語っている;

dar in slouf er vil schiere, dô was er nie-men be-kant. 431, 4

x | ẋ x | ẋ | ẋ x | ẋ

des wart mir ar-men wi-be nie sô græzlîche nôt. “ 2149, 4

(x) | ẋ x | ẋ x | ẋ | ẋ

dô kun-de daz ge-sin-de nimmer vrællîcher sîn, 252, 4

(x) | ẋ x | ẋ x | ẋ | ẋ

done kun-de nie-men wiz-zen wol des volkes aht. 1376, 2

(x) | 'x x | 'x x | 'x | x̣

ez en-wart noch nie an hel-den wirs von friunden getân. " 2183, 4

(x) | 'x x | 'x x | 'x | x̣

done kun-den in diu mæ-re nimmer lieber gesin. 703, 4

(x) | 'x x | 'x x | 'x

前者3例はそれぞれdone, enwart, doneとしても、後者3例はそれぞれdô, wart, dôとしても、否定文という建て前からも、neの文中における位置からも、更には韻律の観点からも一向に差し障りはない。ここにAuftaktに位置するneの有無の恣意性が見られる。以下同様の例文を若干列挙する。下線の施されている語はneの添付の可能なことを示す；

nu siht man bî iu nie-men wan ein Hildebranden stân. 2341, 4

(x) | 'x x | 'x x | 'x | x̣

dô sach er allenthalben; er vant dâ nie-men gram. 791, 2

(x) | 'x x | 'x x | 'x

doch mōh-te iu daz wun-der niemen wol gesagen 229, 2

(x) | 'x x | 'x x | 'x | x̣

im wart in al der werl-de nie sô liebe getân. 297, 4

(x) | 'x x | 'x x | 'x | x̣

"jâ hât der vi-de-le-re die tûr nie so verspart. 1993, 2

(x) | 'x x | 'x x | 'x | x̣

doch wol-den nie ge-schei-den die fûrsten und ir man. 2110, 3

(x) | 'x x | 'x x | 'x | x̣

Daz ist mir nie ge-swi-chen in aller dirre nôt. 2185, 1

(x) | 'x x | x x̣ | 'x | x̣

ich sol mit mî-nen han-den nimmer rûeren iuwer kleit. " 641, 4

(x) | 'x x | 'x x | 'x | x̣

die wîle lebt Gunther, sô kun-dez nim-mer er-gân. 816, 4

(x) | 'x x | 'x | 'x x | 'x

dô sprach diu kûneginne, daz kun-de nim-mer wesen. 2126, 2

(x) | 'x x | 'x x | 'x

dô sprach der grimme verge; “daz wir-det nim-mer ge-tân.” 1559, 4

(X) | \acute{X} X | \acute{X} | \acute{X} X | \acute{X}

§ 6 詩形調整のneの有無

Auftakt以外のneについては、即ち第1 Takt以降に現われるneについては詩形の観点からいかなる説明がなされうるだろうか。この節で対象とすべき用例は次のものである；

(1) 否定詞neの現われる三条件を完全に満たしている<ne一定形—niemen, nie, nimmer>併用型否定文のうち、neが第1 Taktに位置しているもの（前節§ 5の②）；

(2) 否定詞neの現われる三条件を破っている<ne一定形—niemen, nimmer>併用型否定文の5例（本論§ 3の(3), なおnieにはこれに類する用例は見られない）；

(3) <niemen—en一定形>併用型否定文の5例（序§ 2の表、なおこれに類するnie, nimmerの用例は見られない）；

(1)の第1 Taktに位置しているneは韻律上Senkung(X)として必要欠くべからざるものであり、もしneを欠けばHebungの連続(XX)を招来することは以下の分析に見る通りである；

uns en-schei-det nie-men von ritterlîcher wer. 2106, 2

\acute{X} X | \acute{X} X | \acute{X} | \grave{X}

vrô en-was dâ nie-men. weder wîp noch man. 1065, 2

\acute{X} X | \acute{X} X | \acute{X} | \grave{X}

iu en-kun-de nie-men daz wunder volsagen. 1036, 1

\acute{X} X | \acute{X} X | \acute{X} | \grave{X}

ez en-wart nie dege-nen noch mêre geurloubet baz. 318, 4

\acute{X} X | \acute{X} X | \acute{X} | \grave{X}

dô-ne wolt' et Hage-ne nie des râtes abe gân. 882, 4

\acute{X} X | \acute{X} X | \acute{X} | \grave{X}

wir en-ko-men nim-mer wider in der Eurgonden lant. 1587, 4

\acute{X} X | \acute{X} X | \acute{X} | \grave{X}

jâ-ne sold' in Et-zel dar umbe nimmer werden holt. 2026, 4

\acute{X} X | \acute{X} X | \acute{X} | \grave{X}

der-ne kun-de nim-mer sîn komen lieber sîn. 1166, 2

\acute{X} X | \acute{X} X | \acute{X} | \grave{X}

逆にneを付すとSenkungの連続(XX)を招くためにneの添付を避けている用例も否定詞

neが韻律の具となっていることを明示している；

Dâ was nie-men leben-de al der degene, 2308, 1

´X X | ´X X | ´X | `X

jâ wart vrem-der ges-te baz gepflegen nie. 801, 2

´X X | ´X X | ´X | `X

holt wird ´ich in nim-mer, die ez dâ hant getân. "1112, 3

´X X | ´X X | ´X | `X

Auftaktにおいても詩形上の必要からneの添付を避けていると考えられる場合がある。Auf-taktは韻律の枠外に置かれるため音節の数の増えるのを嫌う。Nib. では単音節ないし2音節から成り立っているが、ine ge-(sach) 及びjane ge-と3音節のAuftaktとも見られる。しかしこれは極めてすくない。以下の用例はいずれも否定詞の現われる条件を満たしているが、neの添付による併用型否定文となっていないのは、Auftaktにアクセントを取れない音節が3つ連続するのを嫌ったためと考えられる；

Dô sprach aber Hagene; "mir mac nie-men wi-der-saden. 1212, 1

(X) | ´X X | ´X X | ´X

si ge-leb-ten dâ zen Hiu-nen nie mit kûneginne baz. 1382, 4

(X) | ´X X | ´X X | ´X | `X

ja ge-tuot uns nim-mer lei-de des kûnec Etzelen wîp. "1519, 4

(X) | ´X X | ´X X | ´X | `X

(2)の5例はその定形が文頭に立つ単音節の語の直後に位置していない。それにも拘らず否定詞neを取っている。これら定形にもしneが付されないとHebungの連続を惹き起す。それを防ぐため韻律上の配慮がなされていると考えられる。ここにもまた詩形を整えるためのneの姿が認められる；

"der rât en-ze-me nie-men wan einem degene, 2012, 2

(X) | ´X X | ´X X | ´X | `X

daz si-ne wes-se nie-men den minnen wolde ir lîp. 18, 3

(X) | ´X X | ´X X | ´X | `X

daz in en-darf ze der werl-de niemen holder gesîn. 734, 4

(X) | ´X X | ´X X | ´X | `X

wand ´i-ne kund ´in nim-mer vor mînem tôde verklagen. "1019, 4

(X) | ´X X | ´X X | ´X | `X

ただし、次の用例は仮にneがなくてもHebungの連続をきたさない。韻律上はAbversのAu-

f takに位置しているからsôでもsoneでもよい。sô gerte ich…を、文頭におけると同様に感じてneを付したものと推察される。なお、詳しくは調べてないが、sôが文中に用いられることは極めてまれで、たいてい文頭に立つ；

zählen minen sorgen son' gerte ich nie-mens mēr. 1831, 2
(x) | ẋ x | ẋ x | ẋ

なお、先に本論§4の3の②で取り扱った用例をもう一度ここで今後は詩形の点から照明を当てて、定形にneを添付すると韻律に乱調の現われることを次の分析を通して確認しておきたい；

den schatz den weiz nu nie-men wan got unde mîn; 2371, 3
(x) | ẋ x | ẋ x | ẋ | ẋ

die wî-le liez in Hage-ne nie slahen einen slac. 2053, 3
(x) | ẋ x | ẋ x | ẋ | ẋ

von hel-den kun-de nim-mer wirs gejaget sîn. 1002, 2
(x) | ẋ x | ẋ x | ẋ | ẋ

der einer mit dem lebene kom nie ze Be-che-la-ren sît. 1709, 4
(x) | ẋ x | ẋ x | ẋ x | ẋ

daz ich von mannes minne sol ge-win-nen nim-mer nôt. 15, 4
ẋ x | ẋ x | ẋ x | ẋ

これらの用例の定形にneを付すと、前者3例はSenkungの連続をきたし、後者2例はAbversの Auftaktの最初の音節としてen-が現われることになる。

(3) <niemen — en-定形>併用型否定文の5例はいずれもen-がSenkungとして韻律を整え、これを欠いては^{Hebung}~~Senkung~~の連続を招く。ここに最も鮮明な形で否定詞neが韻律調整として利用されている姿を見てとることができる；

der sol den vanen fûeren; baz ichs nie-man en-gan. 162, 4
ẋ x | ẋ | ẋ x | ẋ

alle die dâ wâren, daz in dâ nie-men en-sach. 432, 4
(x) | ẋ x | ẋ | ẋ x | ẋ

daz tuon ich gerne, vrouwe, wand ichs nie-men baz en-gan. " 895, 4
ẋ x | ẋ x | ẋ x | ẋ

daz ichs an disen zîten ge-fri-den nie-men en-kan. 1984, 4
(x) | ẋ x | ẋ | ẋ x | ẋ

owê daz vor leide nie-men ster-ben ne-mac! 2323, 4

\acute{x} x | \acute{x} | \acute{x} x | \acute{x}

結 び

§ 7 ne の衰退の様態

一見無作為に用いられているような外観を呈している否定詞 *ne* も、定形が *niemen*, *nie*, *nimmer* の否定の代名詞・副詞に先行している場合と後続している場合とに分けて考察すると、先行の場合には *ne* は定形に付せられたり付せられなかったり、後続の場合には *ne* は定形に殆どどの用例において添付されない、という一定の傾向が認められる。

しかし、定形先行の場合の *ne* の添付されている用例を、〈*ne*-定形 — *nimmer*, *nie*, *niemen*〉併用型否定文を更に仔細に検討してみると、そこには *ne* の現われ方に更に明確な傾向が、換言すれば、範囲のせばめられた一定の規則性を見出すことができる。*ne* の現われる併用型否定文は主文であり、更に主文であればどこに位置する定形にでも *ne* が添付されるのではなく、文頭に立つ単音節の語の直後に位置する定形にのみ *ne* は添付される。この三条件を満たして始めて *ne* は現われる。

だが、この三条件は *ne* の現われている併用型否定文より導き出されたものであり、あくまで 面的なものに留る。そこで、この条件が仮に正しいとすれば、この条件に立って逆に *ne* の現われない条件を理論的に設定し、続いて *ne* の現われない単独型否定文をもって、〈定形 — *niemen*, *nie*, *nimmer*〉と〈*niemen*, *nie*, *nimmer* — 定形〉の用例をもって、この条件が満たされない場合には *ne* の現われないことを実証しなければならない。

副文では副文であることの条件が、つまり副文を導く従属の接続詞・副詞的接続詞・関係代名詞・関係副詞等がその文頭に立ち、詩形上の制約を受けるとしてもこれらの語の直後に定形が位置することはない、という条件が否定詞 *ne* の現われるための条件「文頭に立つ単音節の語の直後に位置する定形に *ne* は付せられる」と相反するため、*ne* の現われる可能性はない。このことは実例においても実証される。

また、その文が主文で、かつ定形が *niemen*, *nie*, *nimmer* に先行しているのにその定形に *ne* が付されない用例が数多く見い出される。〈定形 — *niemen*, *nie*, *nimmer*〉単独型否定文がこれである。これらの用例は、①定形が文頭に立つ単音節の語の直後に位置する場合、と②定形が文頭より数えて第 3 語目以降に位置する場合とに分けられる。さて②の場合は定形の位置が *ne* の現われる条件を破っているから、この条件が仮に正しいとすれば *ne* は現われないはずである。実例においても *ne* はこの位置にある定形には添付されていない。

定形が *niemen*, *nie*, *nimmer* より後に位置している用例では、即ち〈*niemen*, *nie*, *nimmer* — 定形〉単独型否定文では、*niemen*あるいは*nimmer*が文頭に立ち、更にこの直後に定形が位置したとしても、*niemen*及び*nimmer*は2音節の語であるから「単音節の語」という条件に合わず、従って定形に *ne* は添付されないと考えられる。しかし、*nie* が文頭に立ち、その直後に定形が位置すれば、*ne* が単音節の語であるから、*ne* の現われる条件に合致する。従って *ne* が定形に付されてもよいはずである。実際には、*niemen*と*nimmer*の場合は、*ne* の現われる条件から理論的に推測するように、定形に *ne* は付されていない。*ne* の場合には理論的には可能なのに、実例ではいずれも *ge-* で始まる定形が位置し、*ne* は取っていない。

以上の3点をもって、*ne* をとっている併用型否定文から抽出した「*ne* の現われる条件」が、*ne* をとっていない単独型否定文によって、言わば裏面から証明された。かくして、*ne* が定形に付せられるか否かは、定形が *niemen*, *nie*, *nimmer* に先行しているか後続しているかの観点を一歩深めたところに、即ち(i)主文であるかどうか、(ii)文頭に単音節の語が位置しているかどうか、iii 定形はその単音節の語の直後に位置しているかどうか、この三条件を満たしているかどうか懸っている。

ne の現われる三条件を満たして現われている *ne* は詩形上はどのような位置を占めているのだろうか。その殆んどが詩の韻律に関与しない *Auftakt* に位置している事実が認められる。更にこの三条件を完全に満たしていながら *ne* が定形に添付されていない用例(上記の②)、〈文頭に立つ単音節の語+定形 — *niemen*, *nie*, *nimmer*〉単独型否定文が数多く見られるが、一体これは何を意味しているのだろうか。同じ文型でありながら、定形は *ne* をとったり、とらなかったりする。更にこの用例では定形に仮に *ne* を付しても詩形の乱調をきたさない。この事実は *Auftakt* における *ne* の有無は全く恣意的なものであることを明示している。

その上、*ne* の現われる条件を破って *ne* の現われている用例が *Nib.* 全体で10例見られる。そのうち5例は定形が「文頭に立つ単音節の語の直後に位置して」いないのに *ne* を取っており、残りの5例は〈*niemen* — *en*—定形〉併用型否定文の用例である。ところが、この10例に *Nib.* の詩形上の分析を施してみると、いずれの *ne* も *Senkung* として韻律に関与していて省くことができない。また、これと同じ文型でも韻律上の障害となる場合には *ne* は付されない。この事実には *ne* が韻律を整えるための具として用いられていることが認められる。

さて以上の、1. 否定詞 *ne* が定形に添付されるには条件が認められ、しかもその条件はきわめて幅の狭いものであり、2. *Auftakt* における *ne* はその有無が恣意的であり、3. *ne* の現われる条件を破ってまで姿を見せている *ne* は韻律調整のためであること、の3点を論拠として、*Nib.* では併用型否定文の *ne* はもうすでにその否定詞としての活性は衰微している。即ち、*ne* に形骸化が進み空洞化現象が起っていると、この小論を結びたい。(完)

[Zusammenfassung]

ZUR NEGATIONSPARTIKEL ne IM NIEBELUNGENLIEDE

ne---niemen; ne---nie; ne---nimmer

Tadahiro OKAZAKI

Es ist eine allgemein bekannte Tatsache, dass die eigentliche Negationspartikel ne in Verbindung mit einer anderen Negation wie niht, niemen, nie, nimmer usw. fehlen kann, während das verneinende Pronomen oder Adverb häufig mit dem ne zusammen die Verneinung bezeichnet. Der vorliegende Aufsatz will das Problem behandeln, ob das Vorhandensein des ne in den das substantivische Pronomen niemen oder das adverbiale nie, nimmer aufweisenden Sätzen auf irgendeiner Regelmässigkeit beruhe.

1. Auf Grund der tatsächlichen Untersuchungen jedes in Nibelungenlied befindlichen Satzes, in dem das ne mit einem anderen negativen Wort wie niemen, nie, nimmer zusammen zum Ausdruck der Verneinung dient, sind die folgenden Bedingungen zu stellen, unter denen das ne als Verneinung zum Verbum finitum hinzutreten kann:

- (1) die Negationspartikel ne zeigt sich nur in dem Hauptsatz;
- (2) das erste Wort des Hauptsatzes muss einsilbig sein;
- (3) das Verbum finitum des Hauptsatzes muss sich unmittelbar nach diesem einsilbigen, an der Spitze des Satzes stehenden Wort stellen.

Mit anderen Worten kann man sagen, dass das ne zwischen dem einsilbigen, an der Hauptsatzes stehenden Wort und dem Verbum finitum dazwischenliegen muss. Die Bedingungen in bezug auf das Erscheinen von dem ne gelten für das Nibelungenlied in vollen Umfang.

2. Zwar ist das ne nur unter den Bedingungen herauszufinden, aber in negativen Hauptsätzen, welche die Bedingungen voll und ganz erfüllen, bleibt das ne sehr häufig weg:

done kun-den in diu m re nimmer lieber gesîn. 703,4

dô kun-de daz ge-sin-de nimmer vrœlicher sîn. 252,4
 Das zeigt an, dass das ne im Auftakt nach Beleiben zu dem Verbum finitum beigefügt worden und entbehrlich geworden ist, wenn im Hauptsatz ein anderes negatives Wort vorhanden ist.

3. In den unten erwähnten Sätzen sind die Bedingungen, unter denen sich das ne sehen lässt, nicht genügend erfüllt:

der rât en-~~z~~-me nie-men wan einem degene, 2012,2
 (X) | \acute{X} X | \acute{X} X | \acute{X} | \grave{X}

daz si-ne wes-se nie-men den minnen wolde ir lîp.
 (X) | \acute{X} X | \acute{X} X | \acute{X} | \grave{X} 18,3

Das in solch einem Satz enthaltene ne darf man nicht weglassen, weil das na hier als Senkung dient. In Sätzen, in denen das Verbum finitum dem verneinenden Pronomen oder Adverb nachfolgt und noch dazu die Negationspartikel ne, das zu dem Verbum finitum hinzutritt, ohne die drei Bedingungen zu erfüllen, einem metrischen Bedürfnis entspricht:

daz tuon ich gerne, vrouwe, wand ichs nie-men baz en-gan.
 895,4 | \acute{X} X | \acute{X} X | \acute{X} X \acute{X}

daz ichs an disen zîten ge-fri-den nie-men en-kan.
 1984,4 (X) | \acute{X} X | \acute{X} | \acute{X} X | \acute{X}

In diesen Darlegungen sind die Beweisgründe dafür zu gewinnen, wie wesenlos die eigentliche Negationspartikel ne geworden ist.

(29. Januar 1973)